

編集後記

戦後六〇年。節目と言えれば節目に違いないこの年、いろいろな雑誌で戦後六〇年の特集が組まれました。この機関誌も会の性質上、戦後六〇年を意識した特集を———という声が上がってもよさそうなものですが、全く上がっていません。おそらく、「六〇年」という言葉によって何かを語ることに、あまり積極的な意味を感じられなかったからでしょう。

しかし、六〇年という時間の経過から、考えるべき何かはあるように思われます。よく用いられる手法ですが、昭和二〇（一九四五）年から六〇年を遡ると明治一八（一八八五）年の年に起きた出来事としては、羅馬字会設立（一月）、硯友社結成（二月）、万国郵便為替協定加入（三月）、坪内逍遙『小説神髓』刊行（九月）、内閣制度採用（二月）等が挙げられます。六〇年という時間の大きさに思いを巡らさずにはられません。

そして、人間は出来事との距離を、決して砲丸投げの競技フィールドのように均等の物さしだけで測っているのではないことにも気づかされます。出来事は年数よりも遠く、あるいは近く感じられる。それは現在とその出来事との関連づけ方によって違ってくるものだと思います。その出来事と現在との関連づけが密接になるほど、距離は短く感じられる。戦後六〇年。自分の中でどのような出来

事が前景となり背景となっているのか、独り、考えを巡らせることには意味があると思います。

さらに、これもよく用いられる手法ですが、現在から六〇年後を展望すると二〇六五年。戦後がそのまま継続できれば、戦後二二〇年。その時、世界はどのように変貌しているのか。何が断絶し、連続してゆくのか。推し量るところは難しいですが、六〇年後、誰がこの機関誌を手にとってくれる人はいるのでしょうか。六〇年後に読まれようなど、夢想もいろいろと言われるでしょう。しかし、活字化し発行する以上、その夢想に耐えられる緊張感を目指したいと思います。これは姿勢の問題として。

第四号には、九本の批評と三本のエッセイ、一本の書評を掲載しております。本会での研究発表に基づく論考の他、多くの投稿をいただき、会員以外からも Justin-Luc Pigot 氏（西村和泉氏訳）よりご寄稿いただきました。ご意見、ご感想等いただければ幸いです。（N）

原爆文学研究 4

二〇〇五年八月三十一日発行

編集 原爆文学研究会

八〇一八六〇

福岡市中央区六本松四―二―一

九州大学大学院比較社会文化研究院

石川巧研究室気付

発行 侑花書院

八〇一〇一三

福岡市中央区白金二一九―一六

TEL 〇九五五六〇二七

FAX 〇九五五四四二一

定価 二二〇〇円（本体 二一四三円）

◇書店にない場合は「地方小出版流通センター扱い」とご指定の上、書店にご注文下さい。

◇継続購読は、花書院「原爆文学研究係」にお申し込み下さい。送料は無料となります。